



**Data**

監督：ルキノ・ヴィスコンティ  
 原作：アルベール・カミュ『異邦人』  
 出演：マルチェロ・マストロヤンニ  
 /アンナ・カリーナ/ベルナ  
 ール・ブリエ/ブルーノ・ク  
 レメル

## 👁️👁️ みどころ

新型コロナウイルスがパンデミック化する中、アルベール・カミュの『ペスト』が大人気になっている。“不条理”を代表する作家は『変身』のカフカと『ペスト』、『異邦人』等のカミュだが、『異邦人』の主人公の一体どこが“不条理”なの？

『太陽がいっぱい』（60年）の主人公は、燦燦と降り注ぐ太陽の下で華麗なる殺人（？）を執行したが、『異邦人』の主人公はなぜ人殺しを？日本の夏も蒸し暑い、アルジェリアの首都・アルジェも暑い。しかし、「暑いから人を殺した」との言い分は、いかにも“不条理”だ。

『ペスト』も悪くないが、トランプ大統領が退場してしまった今、改めて人間の“不条理”について考えるのも一興だ。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□ 『ペスト』もいいが、今日は『異邦人』を！ ■□

1967年4月に大阪大学法学部に入学した私はすぐ学生運動に飛び込んだから、マルクス、レーニン関係の文献を読むことが多くなった。しかし、「実存主義」として有名になっていたサルトルやカミュを読む友人も多かった。ノーベル文学賞作家であるアルベール・カミュは、2021年1月以降、新型コロナウイルスがパンデミック化していく中、『ペスト』（47年）が再評価され、大人気になっている。

『ペスト』は、そのタイトル通り、恐ろしい伝染病「ペスト」（別名、黒死病）をテーマにした小説。フランスの植民地だったアルジェリアのオラン市をペストが襲う中、医師、市民、よそ者、逃亡者等の登場人物たちが助け合いながら、ペスト禍に立ち向かう姿が描かれる。そして、そこでは、語り手である主人公に、「自分たちの力ではペストはコントロールできず、人生の不条理は逃れられない」と語るさせることによって、「世界は不条理に満

ちている」という世界観が明確に示される。2020年1月以降、全世界でパンデミック化した新型コロナウイルスは、約100年前のスペイン風邪以来の“ペスト現象”だが、医学や科学が進歩した今、それをカフカと同じように、“不条理”だけで説明している・・・？

そんなことを考えながら『ペスト』を再読するのも悪くないが、私の考えでは、やはりカミュの代表作は、“不条理”をテーマにした『異邦人』だ。しかして、今日は、ルキノ・ヴィスコンティ監督、マルチェロ・マストロヤンニ主演の『異邦人 デジタル復元版』を鑑賞！

## ■カミュの“不条理”とは？そこで生まれる“反抗”とは？■

黒木瞳のデビュー作の原作になった渡辺淳一の『化身』（86年）は色気タップリで面白い小説だったが、大学1回生の時に読んだ不条理文学として知られているフランツ・カフカの代表作『変身』は、どちらかという気持ち悪い小説だった。なるほど、これがカフカの主張する“不条理”なの？それがぼんやり理解できたが、カミュの『異邦人』を読めば、主人公アルチュール・ムルソーの生き方を通して、カミュの言う“不条理”の概念がカフカの『変身』以上によくわかる。すなわち、カミュの言う“不条理”とは、「明晰な理性を保ったまま世界に対峙するときに現れる不合理性のこと」だ。さらに、カミュによれば、「そのような不条理な運命を目をそむけず見つめ続ける態度」を“反抗”と呼ぶそうだ。そして、「人間性を脅かすものに対する反抗の態度が人々の間で連帯を生む」とされている。

本作冒頭の舞台は、『ペスト』と同じアルジェリア。もっとも、『ペスト』は第二次世界大戦後の物語だったが、本作は大戦前の物語だ。冒頭、拘束状態にあるムルソー（マルチェロ・マストロヤンニ）が警察の取り調べに臨むシークエンスが登場するが、これは一体なぜ？彼は一体何の罪を犯したの？そんな“つかみ（問題提起）”が示された後、本作の本格的なストーリーが始まっていくことに。

カミュの『ペスト』は、ペストという災禍（＝人間を襲う不条理）との闘いを描いた名作だが、本作の主人公ムルソーが「異邦人」とされるのはなぜ？彼は何の不条理に怒り、どんな不条理に“反抗”しているの？

## ■舞台上に注目！それはアルジェリアの首都アルジェ！■

日本は明治維新によって、清国のような西欧列強の植民地になることを免れた。そして、1894年～1895年の日清戦争、1904年～1905年の日露戦争の中で、列強の一員となって、朝鮮と満蒙への権益を広げていった。植民地政策のトップを走っていたのはスペイン、ポルトガルだったが、それに続いてトップになったのがイギリス。フランスはそれより遅れたものの、後のベトナム戦争の地となったベトナムと共に、アルジェリアは大切なフランス領だった。カミュはそんなアルジェリアで1913年に生まれたから、1930年代から物書き業を始めた彼の小説の舞台がアルジェリアになっているのは当然だ。アルジェリアの独立戦争を描いた名作が『アルジェの戦い』（66年）だ。

同作は、私が大学入学した1967年に日本でも公開されたが、1954年から62年にかけてフランスの支配下にあったアルジェリアで起きた独立戦争の姿は、本当にリアルなものだったし、その後のベトナム戦争の前触れにもなった。また、それによってアルジェリアの首都がアルジェであることや、アルジェの都市カスバでオールロケが行われたことによってカスバの名前がさらに有名になった。他方、「君の瞳に乾杯」とは何ともキザな言葉だが、このセリフが有名になったのは、名作『カサブランカ』（42年）によるもの。名曲『時の過ぎゆくままに』と共に永久に残るセリフになったが、「カサブランカ」はフランス領モロッコにある都市だ。さらに日本では、『カスバの女』（昭和30年）が有名だが、なぜ昭和30年にフランス領アルジェの都市カスバを舞台にした歌謡曲が日本で生まれたの？

近時の日本の雨の多さ、台風が多発等は間違いなく地球温暖化の影響。そのため、四季に恵まれていた日本列島も、近時は春と秋がなくなってしまっている。今年、2021年は特に梅雨入りが早いそうだが、6月初旬の今、すでに真夏日を示す気温30度のところもある。しかして、アルジェリアの暑さは？

### ■□■アルジェの暑さは？母の通夜と葬儀に見る男の態度は？■□■

ムルソーが長い時間バスに乗って、マレンゴにある養老院にたどり着いたのは、母親の通夜に出席するため。今の日本では通夜も簡素化されているが、本作を観ていると、1930年代のフランス領アルジェリアでの通夜は大変だ。しかもアルジェリアは暑いから、早く死体を処理しないと……。そんなクソ暑い中でも、ムルソーはノーネクタイながら白い上着を着ているから、汗を拭くのも大変だ。翌日の土葬の様子も日本とは全然違って、むしろ中国式(?)だが、そこでもムルソーの敵は暑さになったようだ。

中国の張藝謀（チャン・イーモウ）監督の名作、『初恋のきた道』（00年）（『シネマ5』194頁）では、母親の葬儀のため故郷に戻ってきた一人息子は母親への熱い思いを見せていたが、本作で目立つのは、母親の死に対してムルソーが全く悲しみを見せないこと。通夜の席には、ずっと泣き通しの女性もいたが、ムルソーは涙なし。また、ムルソーには棺を開けての母親との最後の対面もいらないそうだから、母親の死亡を悲しむ雰囲気は全くない。それは翌日の土葬でもまったく同じで、ムルソーはいかにも面倒そうだ。それは一体なぜ？今風に言えば、彼は生みの母の死とどう向き合っているの？

### ■□■葬儀よりも映画と海水浴！しかし、女への対応は？■□■

ルキノ・ヴィスコンティ監督のもっとも有名な作品は『山猫』（63年）（『シネマ38』未掲載）で、同作には“名花”としてクラウディア・カルディナーレが出演していた。それに対して、「キネマ旬報ベストテン 第8位」、「スクリーン誌ベストテン 第9位」になった本作には、“名花”としてアンナ・カリーナが出演している。日本では近時、アンナ・カリーナ特集が組まれていたが、本作で彼女はムルソーの“お相手”として、どんな役割を？どんな演技を？

アンナ・カリーナ演じるマリーが登場するのは葬儀の翌日。アルジェで偶然再会したという設定だが、ムルソーはこれ幸いとばかりに彼女を連れて海水浴や映画に行き、一夜を共にするからアレレ。そんな展開の中、マリーは「私のこと好き?」、「結婚する気はある?」等々、女として当然の行動を見せ、当然の質問を投げかけてくるが、それに対するムルソーの反応は? 「シラケ世代」という言葉がいつ生まれたのかは知らないが、母親の死亡による通夜・葬儀に関してあんな無気力・無反応な態度を示してきたこの男・ムルソーは、女に対しても、恋に対しても、なぜこんなに無気力、無反応なの?

### ■□■この男はきっと友人ゼロ!しかし悪友を持つと?■□■

フランス映画には、よく建物の中央部に螺旋階段があるアパートが登場するが、ムルソーの住むアルジェのアパートもそれ。要するに、安アパートだ。ムルソーはスーツ姿の会社員だが、あんな性格だからきっと友人はゼロ!?そう思っていたが、同じアパート内にレイモン・サンテス(ジョルジュ・ジュレ)という友人がいたらしい。もっとも、売春斡旋の仕事をしているこの男は悪いウワサしかないようで、同居していた女の喧嘩別れの話を知っていると、まるでやくざの世界の男だ。

そんなレイモンは一方的に自分の言い分をムルソーに話していたが、一緒にいた女の兄を殴ってしまったらしい。そして、ムルソーがマリーとのエッチタイムを楽しみ、一緒に朝を迎えていると、レイモンの部屋から女の悲鳴が聞こえ、結局レイモンは駆けつけてきた警官に連行されてしまったから大変だ。ムルソーの協力で警察から釈放されたレイモンは、今度は女の兄の仲間からつけられていると言うから、ひょっとしてその危険はムルソーにも及ぶのでは?

どうせ友達はいないのだから、こんな悪友とも付き合わなければいいのだが、スクリーン上は、そんなレイモンに誘われたムルソーがマリーも一緒に海に行って遊ぶシークエンスになる。そこはレイモンの友人の別荘だから結構優雅なお遊びだが、そこではレイモンたちの後をつけてきた3人の男たちとのトラブルが発生!彼らはレイモンが殴った女の兄の仲間たちだが、男同士の殴り合いやナイフを使った喧嘩はまだしも、そこで拳銃を使うのはまずいのでは・・・?

### ■□■なぜムルソーは殺人を?その答えは「暑かったから」!■□■

登山家の間では、「なぜ、山にのぼるのか」の質問に対する、アルピニストのジョージ・マロリーの「そこに山があるからだ」との答えが有名だ。しかし、殺人罪の裁判で必ず大きな論点になる、「殺人の動機」について、「暑かったから」というのは答えにならないのでは?フランス領のアルジェリアでどんな裁判が行われるのかは知らないが、ムルソーに付いた弁護人はそれなりに優秀で、検事側が何を突っ込んでくるかをムルソーに説明し、動機の点についても十分な打ち合わせをしようとしていた。ところが、それについて肝心のムルソーは?

通夜や葬儀でのムルソーの態度、行動も情状面では不利。したがって、法廷では「泣き

たい気持ちを無理に抑えていた」と証言すればいいのだが、それについてもムルソーは？ 法廷には養老院の理事たちの他、マリーも出廷してムルソーの無実を訴えたが、葬儀の翌日に海や映画に行っていたことは印象が悪い。さらに、レイモンの証言も陪審員には悪印象しか与えなかったようだ。そして、裁判のラスト、被告人質問の中で、裁判官から「なぜ殺したのか」と聞かれると、ムルソーは「太陽のせい、暑かったから」と答えたから最悪だ。“不条理”ながらもそれがムルソーの真実だったのかもしれないが、そんな証言を法廷でするのはあまりにあまり。しかして、下された判決は？

死刑台に向かうムルソーが、「神を信じないのか？」と説得する神父に対しても「神なんかどうでもいい！」と叫ぶ姿を確認しながら、改めてカミュの言う“不条理”とは何かをしっかりと考えたい。

2021（令和3）年6月9日記